

## 1 指導のねらい

- ・ 条件に合わせて自分の考えを書きまとめる(領域 「書くこと」)

## 2 学習活動の設定

文学教材「走れメロス」の登場人物に関わる課題について、肯定、否定の立場を決め、根拠を明確にして立論の文章を書く。その後、自分の決めた立場とは反対の立場で読み、反論の文章を書きまとめる。 ※この学習は他の文学教材や他の学年にも応用できる

## 3 指導の実際(2時間扱い/第2学年対象)

学習活動	指導上の留意点・評価(○印)
1 本時の目標を確認する。	・ 本時の目標が、「走れメロス」の登場人物に関わる課題について、肯定、否定の立場を決め、根拠をあげて立論の文章を書きまとめることと、それとは反対の立場で反論の文章を書きまとめることであることを確認する。
2 課題「メロスは信頼できる人間である」について、文章中の描写を根拠にして、肯定、否定の立場を決める。	・ 登場人物の言葉と地の文との関わりに注目させる。 ・ 登場人物の人柄や考え方が分かる描写に注目させる。
3 自分の決めた立場で、根拠を明確にして立論の文章を書きまとめる。 (学習プリント)	・ 登場人物の言葉と地の文との関わり、また、登場人物の人柄や考え方が分かる描写などを根拠に自分の考えを書きまとめさせる。 ○自分の考えを、文章中から根拠を見付けて書きまとめている。〈書く能力〉
4 課題について自分の決めた立場とは反対の立場で考え、反論の文章として根拠を明確にして書きまとめる。(学習プリント)	・ 反対の立場に立って読ませることにより、文章に表現されていることを客観的にとらえさせ、多様な考え方ができることに気付かせる。 ○文章を様々な角度から読み深めて考えたことを、根拠に基づいて書きまとめている。〈書く能力〉
5 友だちと立論・反論の文章を読み合い、考えを広げたり深めたりする。	・ 自分の考えとの共通点や相違点に着目させたり、友だちの考えを評価させたりする。 ○自分の考えと友だちの考えを比較し、考えを広げたり深めたりしている。〈国語への関心・意欲・態度〉

## 4 ここがポイント

- ◇ 一方的な読みではなく、様々な角度から多様な読みをすると読解が深まることを理解させる。
- ◇ この学習後に討論の時間を設け、「話すこと・聞くこと」の学習を行うことも有効である。





※解答例1と3は肯定側としての例です。

解答例 1

(立論)

最終場面で、王は「真実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうかわしも仲間に入れてくれまいか。」と言っている。最初の場面での王は精神的に追い込まれた状態であったが、最終的には、メロスの行動によって人を信用する心を取り戻している。

(反論)

「王は憫笑した。『おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。』」「その王の顔は蒼白で、みけんのしわは、刻まれたように深かった」とあり、国を治める王は孤独で、非常に難しく苦しい立場にあることが分かる。今後もその立場は変わらないことから、王が人を信用するようになることは有り得ない。

解答例 2

(立論)

王は「人を信ずることができぬ」と言って肉親を殺してしまっただが、最終場面で「顔を赤らめて」「おまえらの仲間の一人にしてほしい」と言った。その王を、群衆は「王様万歳」と支持している。過去を改めた王は、民衆のために尽くす気持ちになっている。

(反論)

「人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して」「世の中の、正直者とかいうやつばらうんと見せつけてやりたい」という王の言葉や、肉親である妹婿、世継ぎ、妹、皇后、家臣を殺してしまったという王の行動から、人を信用することができない王の心理状態が分かる。この心理状態は簡単には変化しない。

解答例 3

(立論)

王の策略を乗り越えて刑場に戻ったメロスを、王は「まじまじと見つめて」いる。メロスの姿を一心に見つめる王が「顔を赤らめて」いることからわかるように、王は自分の行為を恥じ、悔い改めようとしている。

(反論)

メロスが山賊に襲われた時、「王の命令で待ち伏せしていた」ことが明らかになった。そのようなことをしてまでもメロスが約束を守ることを阻止するような王は、人を信用するようになるはずがない。